

茨城県筑西市

# 海老ヶ島城跡

— 県営ほ場整備事業（経営体）松原地区関連遺跡発掘調査報告書2 —

2006

茨城県筑西土地改良事務所  
筑西市教育委員会  
株式会社地域文化財コンサルタント

## 例 言

1. 本書は茨城県筑西市松原141ほかで計画された県営ほ場整備事業に伴い実施した海老ヶ島城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は筑西市長富山省三の委託を受けた株式会社地域文化財コンサルタントが、茨城県埋蔵文化財発掘調査基準に基づき、筑西市教育委員会の指導のもとに行った。
3. 発掘調査は平成18年5月16日から6月2日まで実施した。
4. 発掘調査は斎藤洋が担当して行った。
5. 本書の執筆、編集は第1章を筑西市教育委員会が、他を斎藤武士が行った。
6. 調査組織

調査担当者	斎藤 洋	(調査研究部課長)
調査員	斎藤 武士	(調査研究員)
調査員	小川 将之	(調査研究主任)
調査補助	佐々木正治	(調査研究員)
調査補助	遠藤 雄一郎	(調査研究員)
調査補助	野村 浩史	(調査研究員)
整理補助	増田 香理	(調査研究部整理技術員)

7. 調査に関わる遺物・図面・写真等は、筑西市教育委員会が一括して保管している。
8. 調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏、諸機関に協力を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。(敬称略)

加倉井豊邦 問宮正光 古田部鞠子 カワヒロ産業 芦田和義 井上哲朗 板垣徹

## 凡 例

1. 遺構平面図中の方位は座標北を示し、土層断面図に示した数値は標高 (m) を示している。
2. 全体図中の枠及び番号は部分図番号を示す。
3. 発掘調査及び整理事業においては以下の略号を用いた。注記についてもこれに準じている。

海老ヶ島城跡・・・EBI                      トレンチ・・・T  
サブトレンチ・・・ST

4. 本書の挿図縮尺は以下の通りである。

全体図・・・・・・・・・・1/2500                      部分図・・・・・・・・・・1/800  
トレンチ平面図・・・・・・1/100                      トレンチ断面図・1/100

5. 本書に用いたスクリーンは以下の通りである。

 遺構範囲       攪乱範囲

6. 遺物番号は、本文・挿図・写真図版ともに一致している。

# 目次

## 本文目次

例言・凡例

目次

第1章 調査の経緯	2
第2章 海老ヶ島城跡の概要	
2-1 海老ヶ島城跡の位置と立地	3
2-2 歴史的環境	3
第3章 発掘調査の概要	
3-1 調査の方法	4
3-2 発掘調査の経過	4
第4章 検出された遺構と遺物	4
第5章 まとめ	19
報告書抄録	

## 挿図目次

図1 位置図及び周辺の遺跡	1	図9 トレンチ9, 10平面及び断面図	12
図2 位置図(迅速図)	1	図10 トレンチ11, 12平面及び断面図	13
図3 調査位置図	2	図11 トレンチ13, 14平面及び断面図	14
図4 遺構全体図	5, 6	図12 トレンチ15平面及び断面図	15
図5 トレンチ1, 2平面及び断面図	8	図13 トレンチ16, 17平面及び断面図	16
図6 トレンチ3, 4平面及び断面図	9	図14 トレンチ18, 19, 20平面及び断面図	17
図7 トレンチ5, 6平面及び断面図	10	図15 遺物実測図	18
図8 トレンチ7, 8平面及び断面図	11	表1 遺物観察表	18

## 写真図版

写真図版1 海老ヶ島城・松原村絵図	写真図版6 トレンチ13～16検出
写真図版2 調査区遠望	同 土層断面
調査前全景	写真図版7 トレンチ17～20検出
写真図版3 トレンチ1～4検出	同 土層断面
同 土層断面	写真図版8 トレンチ冠水状況
写真図版4 トレンチ5～8検出	サブトレンチ1～7検出
同 土層断面	写真図版9 出土遺物
写真図版5 トレンチ9～12検出	写真図版10 出土遺物
同 土層断面	



図1 位置図及び周辺の遺跡(国土地理院1/25000筑波・真壁)

16海老ヶ島城跡 59中根遺跡 60炭焼戸西遺跡 61炭焼戸東遺跡 62新堀遺跡  
64城ノ内遺跡 65田宿炭焼戸遺跡 66菰冠北遺跡 67菰冠南遺跡 68戸張遺跡

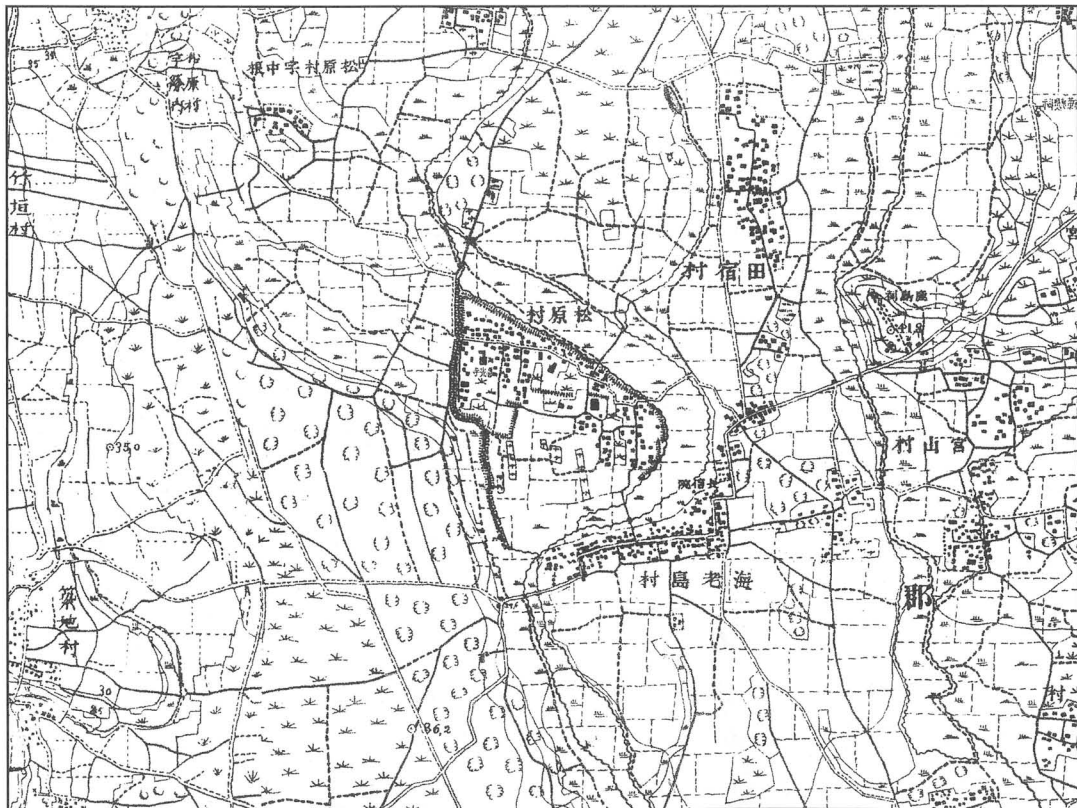


図2 位置図(明治19年測量迅速図 S=1/25000)

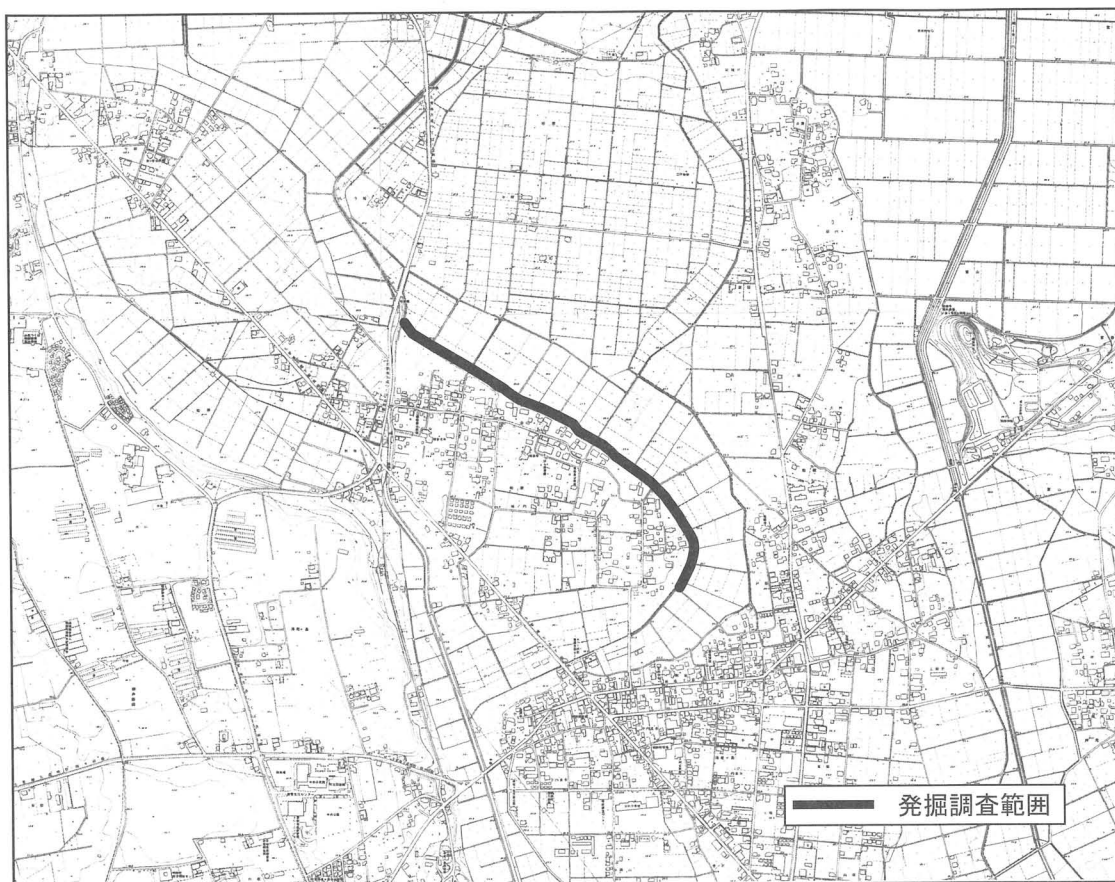


図3 調査位置図 (S=1/10000)

## 第1章 調査の経緯

平成14年8月、茨城県下館土地改良事務所から、明野町松原地区における県営ほ場整備事業に伴い、「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて（照会）」が提出された。明野町教育委員会は、事業予定地に3ヶ所（炭焼戸東遺跡、炭焼戸西遺跡、中根遺跡）の周知の埋蔵文化財包蔵地（以下「遺跡」という）が所在していることを確認し、平成15年8月、照会に基づき事業予定地内の遺跡について試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺構と遺物を確認したことから、遺跡の取り扱いについて茨城県下館土地改良事務所（平成17年4月1日から「茨城県筑西土地改良事務所」に名称変更となる）と協議を行った。

その後、平成17年3月28日付け、明野町は下館市、関城町、協和町との市町村合併により筑西市となったため、改めて事業予定地の埋蔵文化財について協議を行った。その協議において、事業が上記遺跡のほかに、海老ヶ島城跡にも及ぶことが判明したため、平成18年1月31日及び2月3日の2日間にわたり試掘調査を実施した。試掘調査の結果、海老ヶ島城の外堀の一部と思われる溝状の遺構を確認したことから、再度、茨城県筑西土地改良事務所と協議を行った。協議において、工事の設計変更が困難なため、事業着手前に記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

筑西市教育委員会と茨城県筑西土地改良事務所は、発掘調査の実施に向けて具体的内容の調整を図り、発掘調査の方法として、現在、調査対象地が用水堀として使用されているため、全域を調査することが困難であることから、トレンチ法により部分的な調査を実施することとなった。調査に際して、筑西市と茨城県は「県営ほ場整備事業（経営体）松原地区に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する覚書一部変更覚書」および「埋蔵文化財に関する協定書」を取り交わし、調査を(株)地域文化財コンサルタントに委託することとした。(株)地

域文化財コンサルタントは、平成18年4月7日付け、茨城県教育委員会教育長宛に「埋蔵文化財発掘調査の届出について」を提出し、筑西市教育委員会の指導のもと、平成18年5月16日から6月2日まで発掘調査を実施することとなった。

## 第2章 海老ヶ島城跡の概要

### 2-1 海老ヶ島城跡の位置と立地

筑西市は、栃木県との境に接する茨城県西部に位置する。平成17年3月28日に下館市、関城町、明野町、協和町の4市町の合併により筑西市となった。海老ヶ島城跡は旧明野町に所在する。旧明野町周辺は、東に筑波山を望み、東端を霞ヶ浦に流入する桜川、西端を利根川水系の小貝川が流れる。河川周辺は広大な沖積平野を形成し、中央部は洪積台地となる。

海老ヶ島城跡は、下妻街道と筑波街道が交差する旧明野町市街地の北側に所在する。城跡の西側に接して大川が流れ、東には観音川が流れる。遺跡は両河川に挟まれた標高24～27mの微高地と低地の境を利用して形成され、北東は城跡を巡るように水田に囲まれている。

### 2-2 歴史的環境

海老ヶ島城は寛正2年（1461）12月から普請を開始し、応仁元年（1467）に下総結城の当主結城成朝の嫡男秀千代が10歳で居城する。秀千代は後に海老原輝朝と称し海老原氏の祖となる。その後、俊朝・俊元と三代にわたり城主となるが、天文15年（1546）に、隣接する小田方の宍戸四郎通綱に攻められ落城する。

城が結城方から小田方に移り、小田家家臣の平塚山城守長信が城主となる。弘治2年（1556）に結城政勝は北条氏康と結び、小田氏治攻略のため当城を攻める。結城政勝は大軍を率いて海老嶋表に陣取り、小田氏治は二千騎足らずの人数で海老嶋表に出陣した。この戦で、小田勢は大敗し、氏治は本領小田城にも戻れず土浦城に籠もる。この際、海老ヶ島城を含む小田領の大部分を結城勢が押さえ、海老ヶ島城は結城方に戻る。しかし2年後の弘治4年（1558）には小田方に戻り、再び平塚長信が城主となっている。永禄2年（1559）に小田氏治は結城晴朝の家督相続の混乱に乗じ結城城を攻めるが、晴朝の実家の小山高朝等の反攻に遭い、海老ヶ島城、大島城、北条城を攻略される。この結城攻めの際に平塚長信は倉持村で討ち死にする。

永禄3年（1560）、多賀谷・佐竹・小田・宇都宮・小山の連合で結城城攻めをおこなう。この戦の和議によって海老ヶ島城は結城方の手を離れることとなる。後に小田方に再び戻り平塚刑部大輔が城代となる。

永禄12年（1569）に佐竹義重が海老ヶ島城を攻め平塚大輔を降し、城は佐竹領となる。義重は当城を宍戸義長に与え、宍戸義長は弟の外記を城代とし、外記は海老ヶ島新左衛門と称したといわれる。文禄元年（1592）、宍戸義長が本領宍戸から領地替えになり当城に移る。慶長7年（1602）佐竹氏の秋田転封に宍戸氏も同行し、元和元年（1615）の一国一城令により破却される。

廃城となった後、松原村の農民が移住し集落が形成される。近世集落の形成事例としても珍しく、寛文12年（1672）の海老ヶ島城絵図などからも、その様子が窺い知ることができる。

## 第3章 発掘調査の概要

### 3-1 調査の方法

調査は、先に行われた試掘調査を基に発掘調査範囲内に2m×10mトレンチを20本設定した。さらに確認が必要と思われる地点にサブトレンチを7本設定しこれを補った。

調査をトレンチ法としたことは、城跡を巡る堀が農業水路ならびに生活排水路とされているため、長期にわたる全面調査が困難なことによる。また、このたびのは場整備事業にむけて第一に当地の排水路敷設工事を最優先させることによる時間的制約の下に緊急的な調査となった。

表土除去は重機を用いて遺構確認面まで掘り下げ、遺構確認及び遺構の掘り下げは人力で行った。測量はトータルステーションを使用し、公共座標を基準として記録した。トレンチは調査区北西端を1とし、20まで設定した。サブトレンチもこれに準ずる。トレンチ断面は1/20で実測・記録した。写真は35mmカラーリバーサルフィルムを主に使用し、500万画素デジタルカメラでこれを補った。

### 3-2 発掘調査の経過

- 5月16日 重機・発掘機材搬入及び調査開始。トレンチ1, 11調査開始。トレンチの状況を確認・記録。
- 5月17日 トレンチ9, 10の調査を開始する。トレンチの状況を確認・記録する。
- 5月18～22日 雨天及び調査区冠水のため調査を中断する。
- 5月23日 当初トレンチ11からトレンチ1を優先的に調査する予定であったが、水が引かないためトレンチ20から調査を再開する。トレンチ20～17の調査を開始する。トレンチの状況を確認・記録し、調査を終了する。
- 5月24日 トレンチ16～13の調査を開始する。トレンチの状況を確認・記録し、調査を終了する。
- 5月25日 トレンチ13～12の調査を開始する。トレンチの状況を確認・記録し、調査を終了する。
- 5月26～30日 雨天及び調査区冠水のため調査を中断する。
- 5月31日 調査を再開する。調査区の水は引かず筑西市教育委員会との協議の結果、検出遺構の断面確認を断念する。トレンチ8～5の調査を開始する。トレンチの状況を確認・記録し、調査を終了する。
- 6月1日 トレンチ4～2の調査を開始する。トレンチの状況を確認・記録し、調査を終了する。
- 6月2日 サブトレンチ1～7の調査を開始する。トレンチの状況を確認・記録し、調査を終了する。調査終了写真撮影。発掘機材を搬出、現地発掘調査を完了する。

## 第4章 検出された遺構と遺物

本調査はトレンチ内の部分調査であり、検出された遺構それぞれの関係を一括して示すことは難しい。ここでは、各トレンチにおいて確認できた状況について述べる。

- T-1 確認面は粘土層である。すべてのトレンチにおいてであるが、トレンチ土塁側に近代に造成され、現在も使用されている溝跡が残る。遺構は遺存しなかったが、覆土から天目茶碗(図15-13)が出土している。

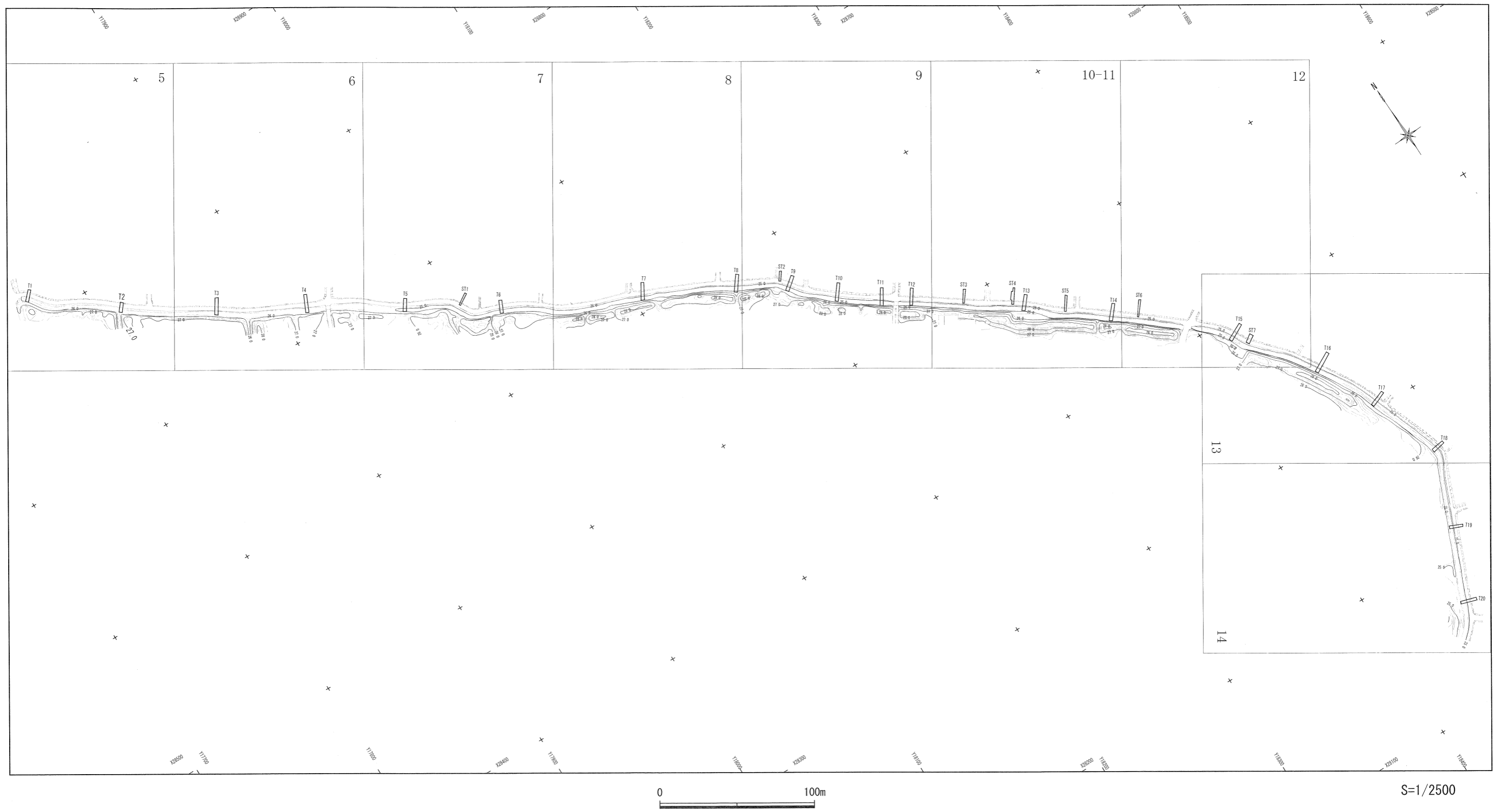


図4 遺構全体図



- T-2 確認面は粘土層である。トレンチ土塁側に堀を2条検出する。土層断面から黒色粘土質土層を掘り込んで遺構が形成されていることを確認した。
- T-3 確認面は粘土層である。土塁側に1条の堀を検出。
- T-4 確認面は粘土層である。土塁側に2条の堀を検出。
- T-5 確認面は粘土層である。土塁側に2条の堀を検出。堀の覆土はそれぞれT-4の堀の覆土と類似する。
- S T-1 確認面は粘土層である。土塁側に1条の堀を検出。
- T-6 確認面は粘土層である。遺構は未検出である。
- T-7 確認面は粘土層である。土塁側から幅1.7m、2.6mの堀2条を検出。
- T-8 確認面は礫層及び粘土層である。土塁側から幅不明、2.1m、1mの堀3条を検出。
- S T-2 確認面は礫層及び粘土層である。中央に1条の堀を検出。
- T-9 1条の堀を検出。堀の規模は幅2.5m、深さ1mで断面は葉研を呈す。トレンチ北側には耕作に伴うと思われる黒色土を検出。
- T-10 確認面は礫層及び粘土層である。3条の堀を検出。規模は土塁側から幅1.3m深さ0.8m、1.9m-1m、2.5m-0.9mである。覆土等から中央の堀がT-9の堀と続くと考えられる。
- T-11 確認面は礫層及び粘土層である。2条の堀を検出。土塁側の堀はここで立ち上がり、所謂畝堀と考えられる。堀の規模は土塁側から幅2.9m深さ0.7m、2.3m-0.6mである。
- T-12 確認面は礫層及び粘土層である。2条の堀を検出。規模は土塁側から幅3.3m、1.8mである。
- S T-3 確認面は礫層及び粘土層である。土塁側に2条の堀を検出。
- S T-4 確認面は礫層及び粘土層である。トレンチ中央の堀から畝を検出。
- T-13 確認面は礫層及び粘土層である。2条の堀を検出。堀は土塁が折れるのに合わせるように曲がる。堀の規模は土塁側から幅2.3m、2.5mである。
- T-14 確認面は礫層及び粘土層である。3条の堀を検出。堀の規模は土塁側から、不明、幅4.4m深さ0.6m、0.5m-0.3mである。覆土中からかわらけ（図15-4）を検出。
- S T-6 確認面は礫層及び粘土層である。3条の堀を検出。
- T-15 確認面は礫層及び粘土層である。平面が広がりトレンチ北側に堀1条を検出。規模は土塁側から幅1.9m深さ0.6mである。
- S T-7 確認面は礫層及び粘土層である。2条の堀を検出。
- T-16 確認面は礫層及び粘土層である。4条の堀を検出。規模は土塁側から不明、幅3m深さ0.8m、2m-0.3m、1.1m-0.4mである。
- T-17 確認面は礫層及び粘土層である。2条の堀を検出。規模は土塁側から幅2.7m深さ0.7m、1.3m-0.7mである。
- T-18 確認面は礫層及び粘土層である。2条の堀を検出。形状からトレンチ17の堀に対応するものであると考えられる。規模は土塁側から不明、幅2.2m深さ0.7mである。
- T-19 確認面はローム層である。遺構は未検出である。
- T-20 確認面は礫層及び粘土層である。遺構は未検出である。

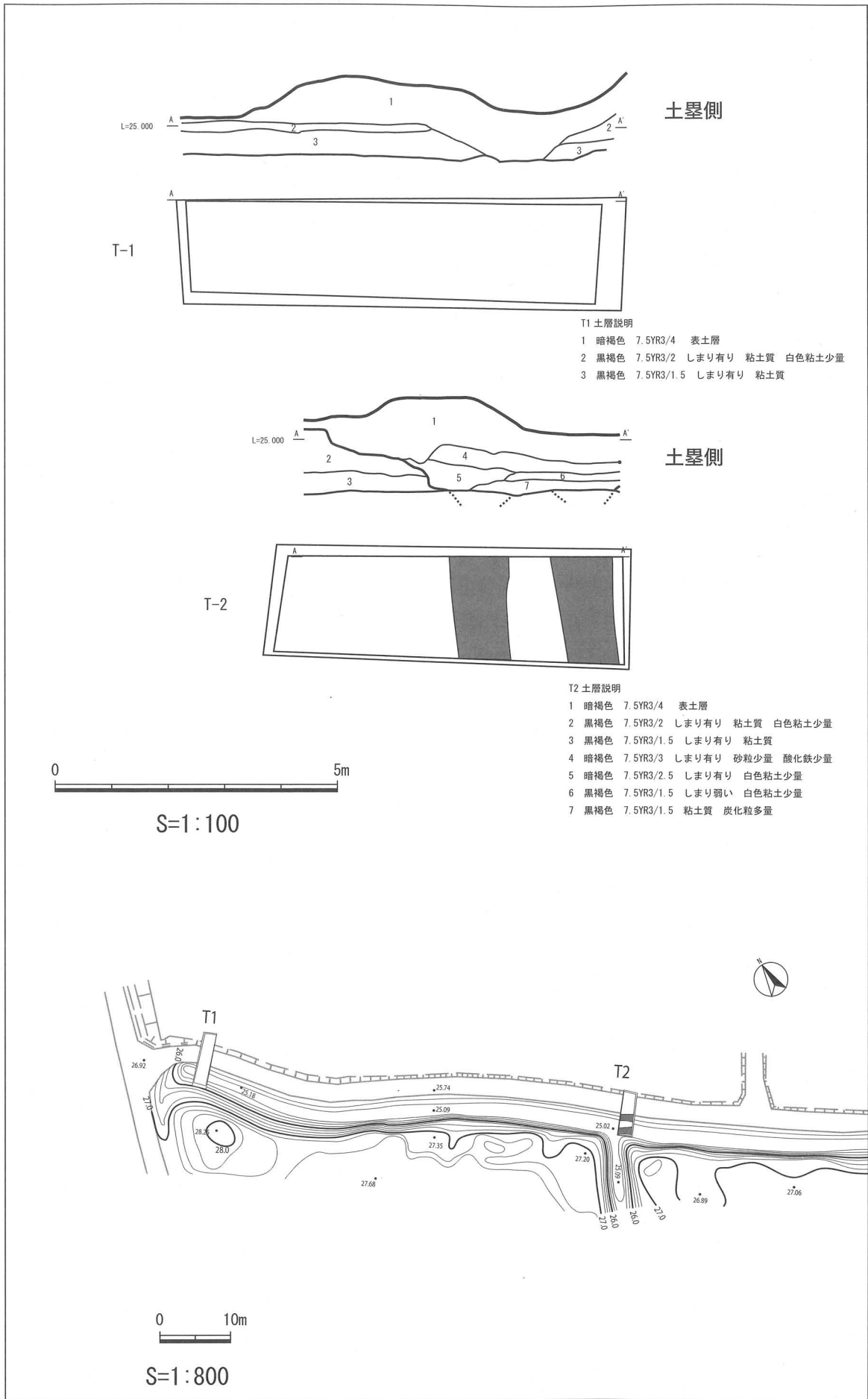


図5 トレンチ1,2平面及び断面図

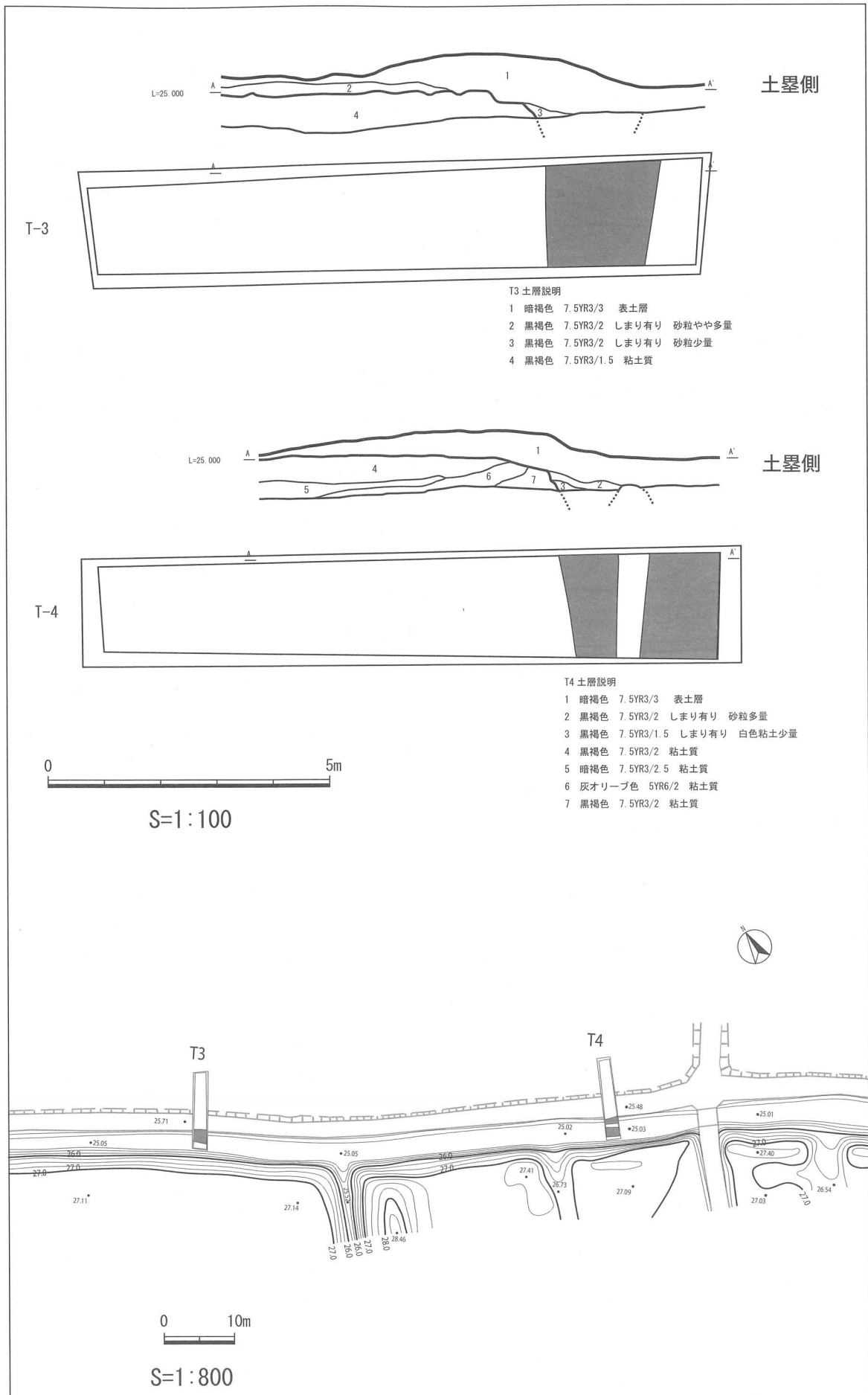


図6 トレンチ3,4平面及び断面図

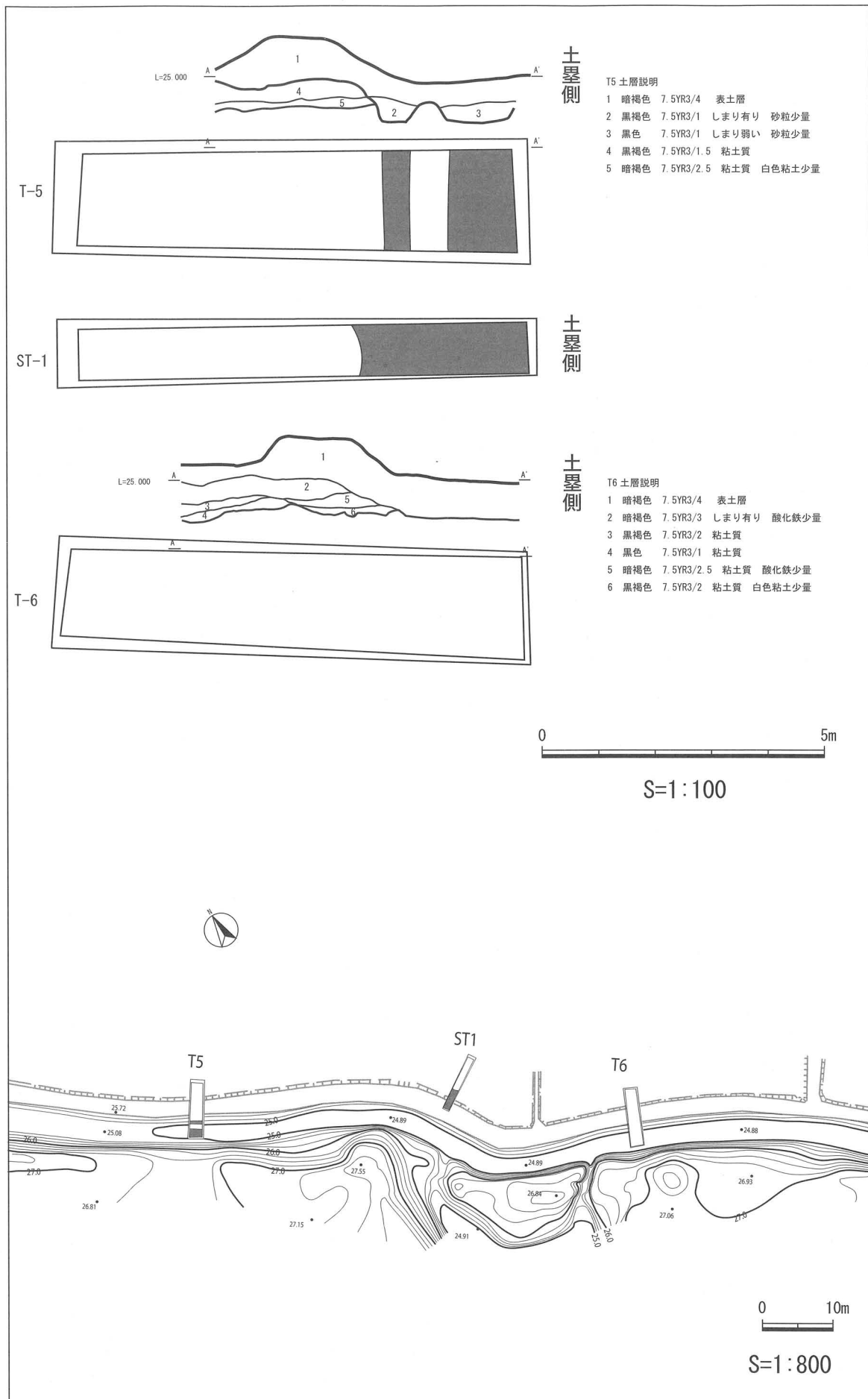


図7 トレンチ5,6平面及び断面図

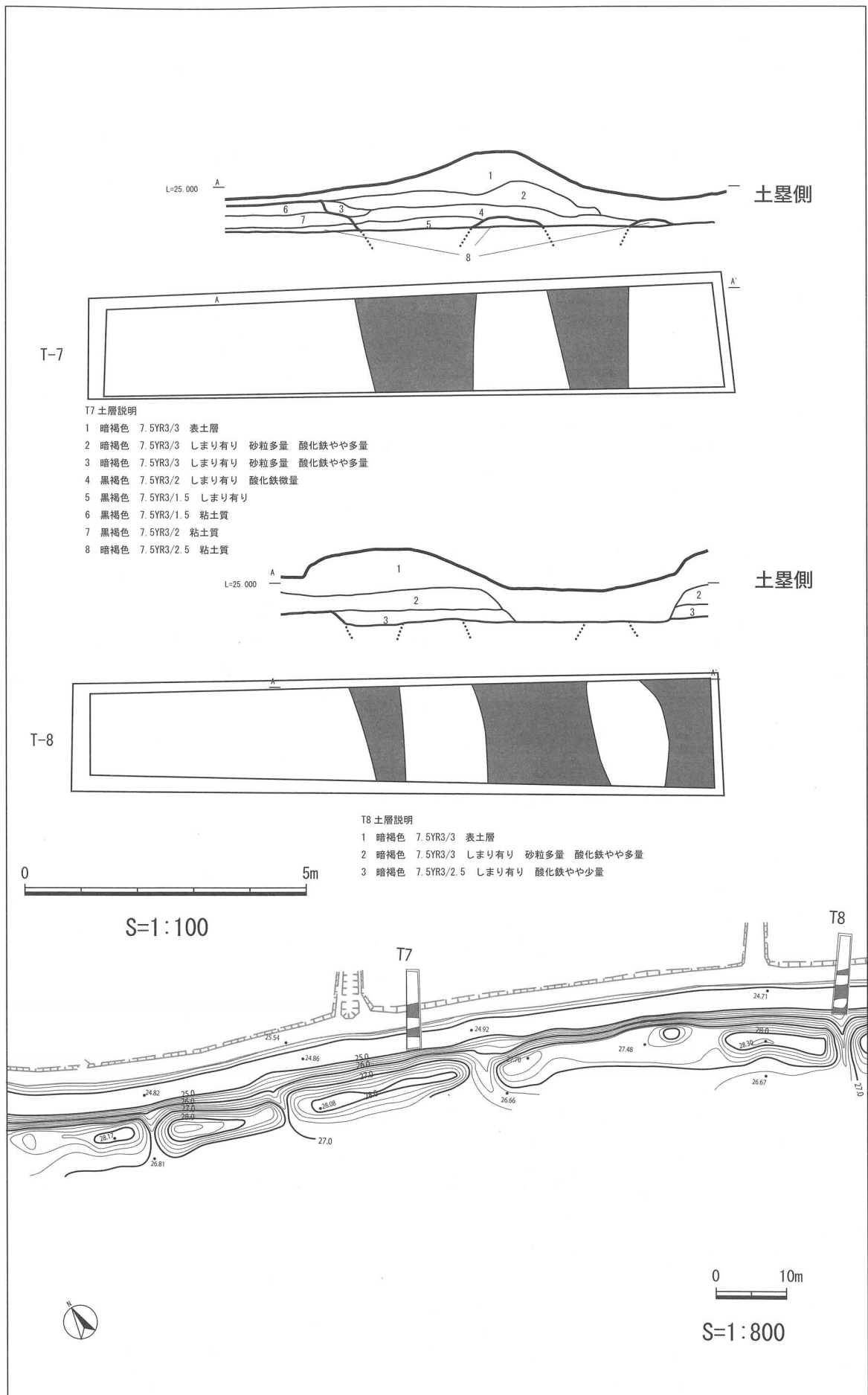


図8 トレンチ7, 8平面及び断面図

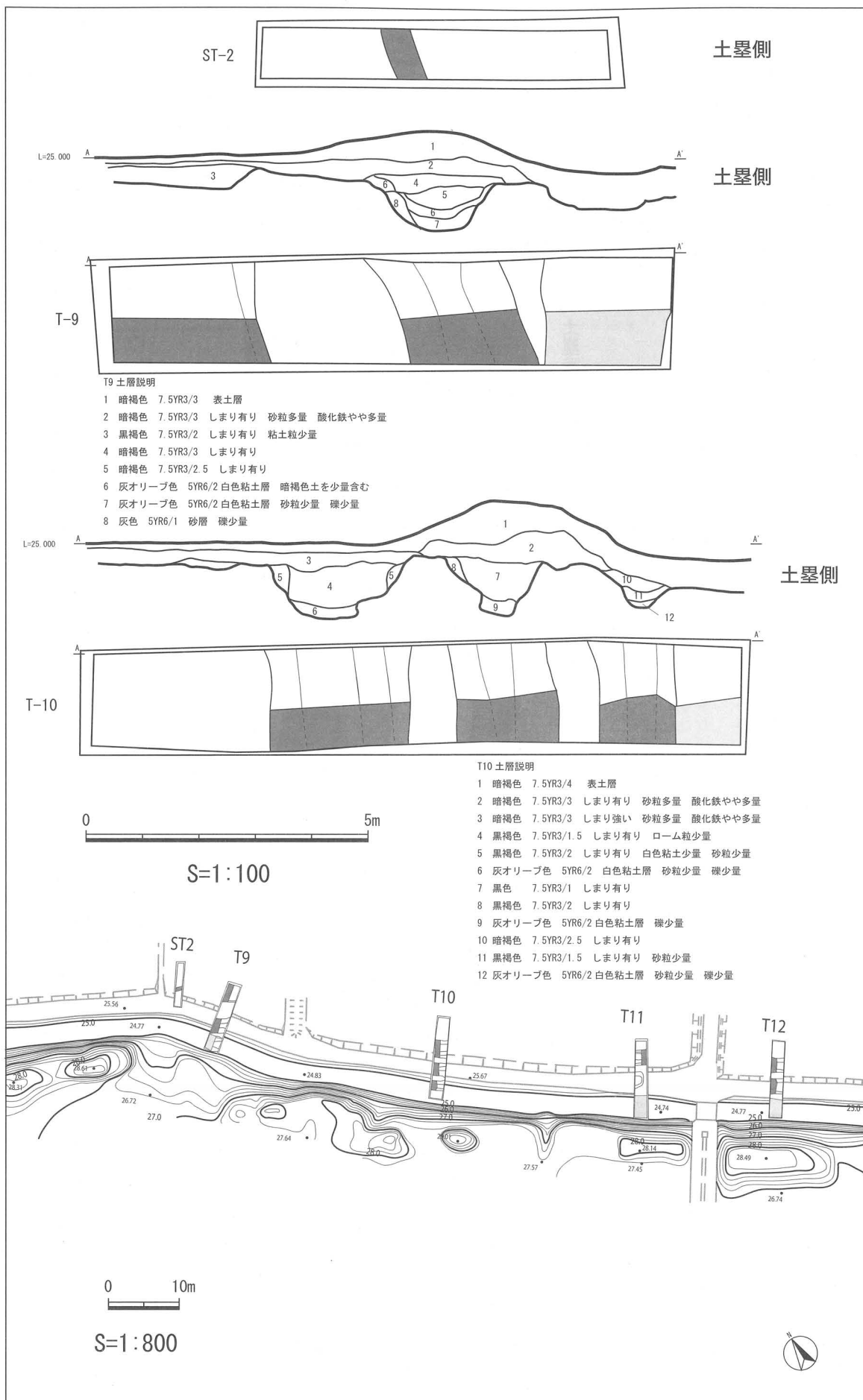


図9 トレンチ9, 10平面及び断面図

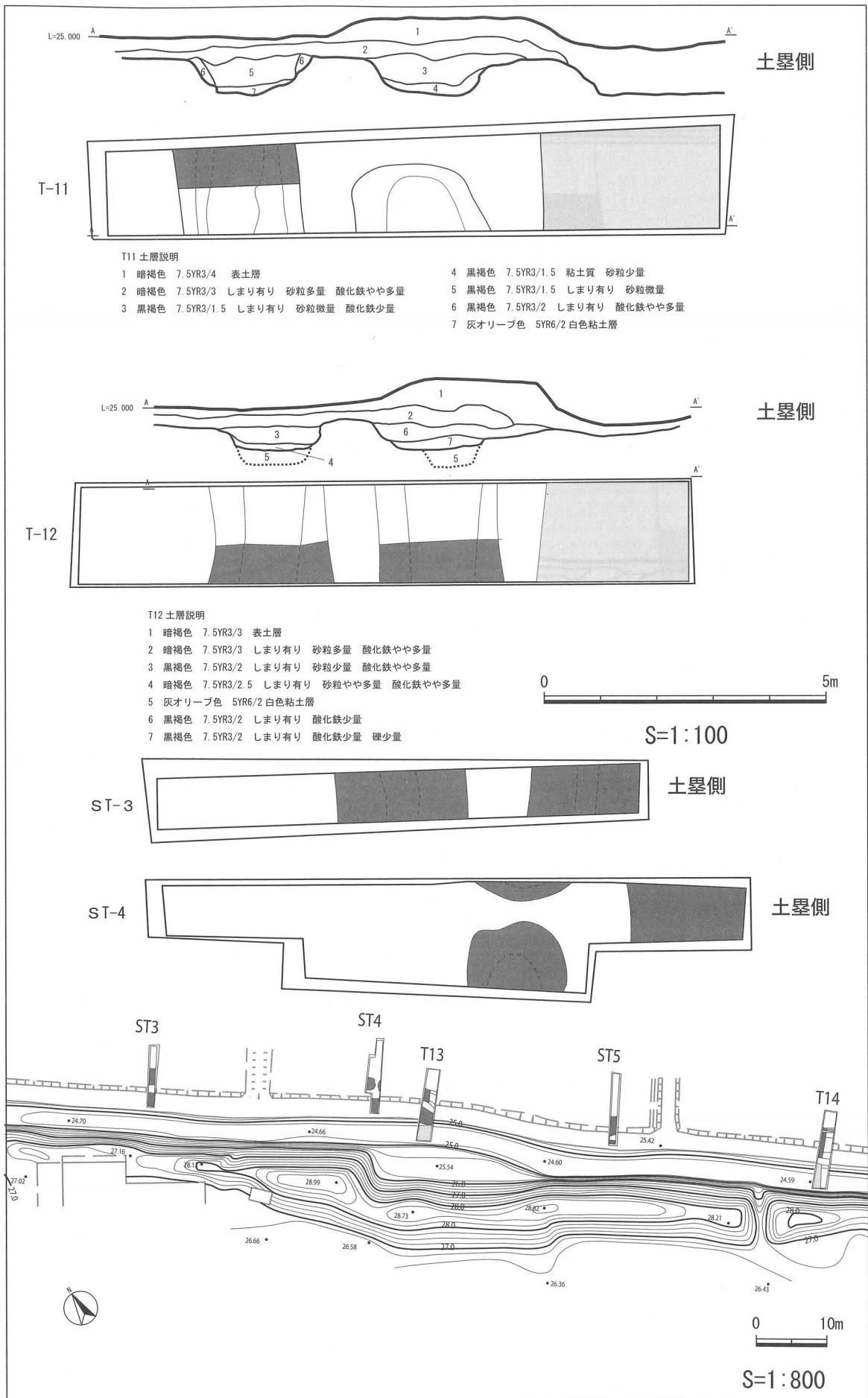


図10 トレンチ11, 12平面及び断面図

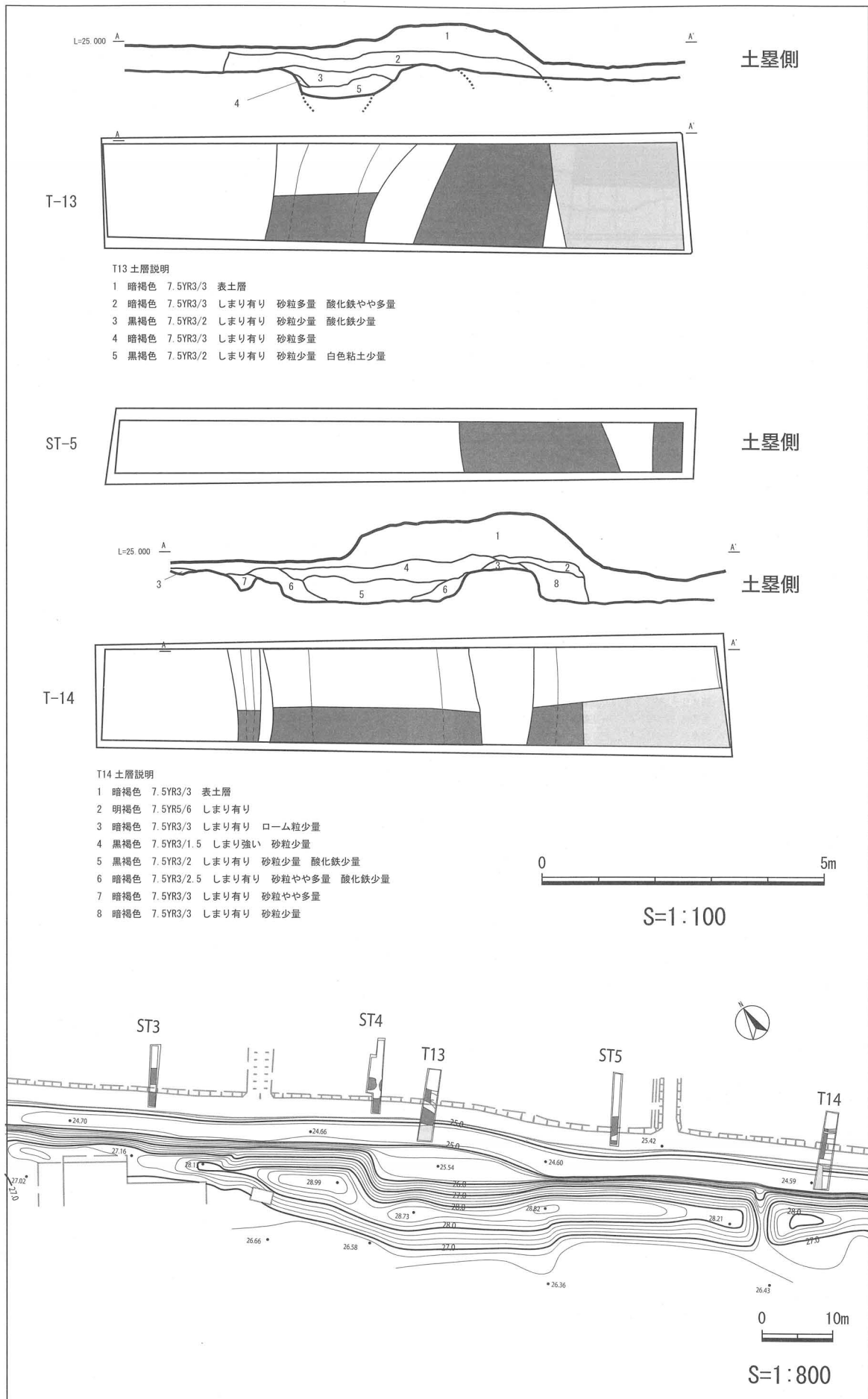


図11 トレンチ13, 14平面及び断面図



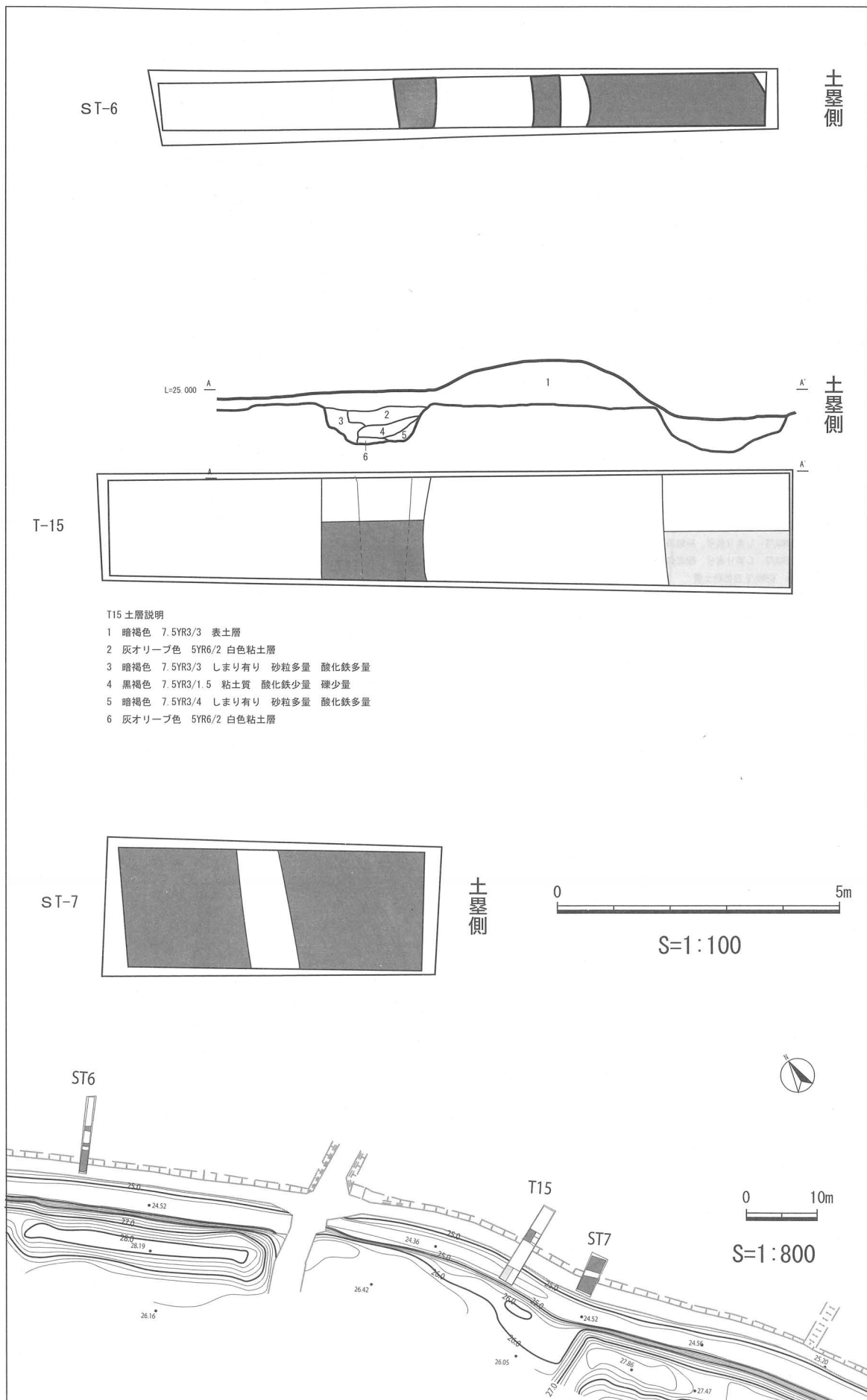


図12 トレンチ15平面及び断面図

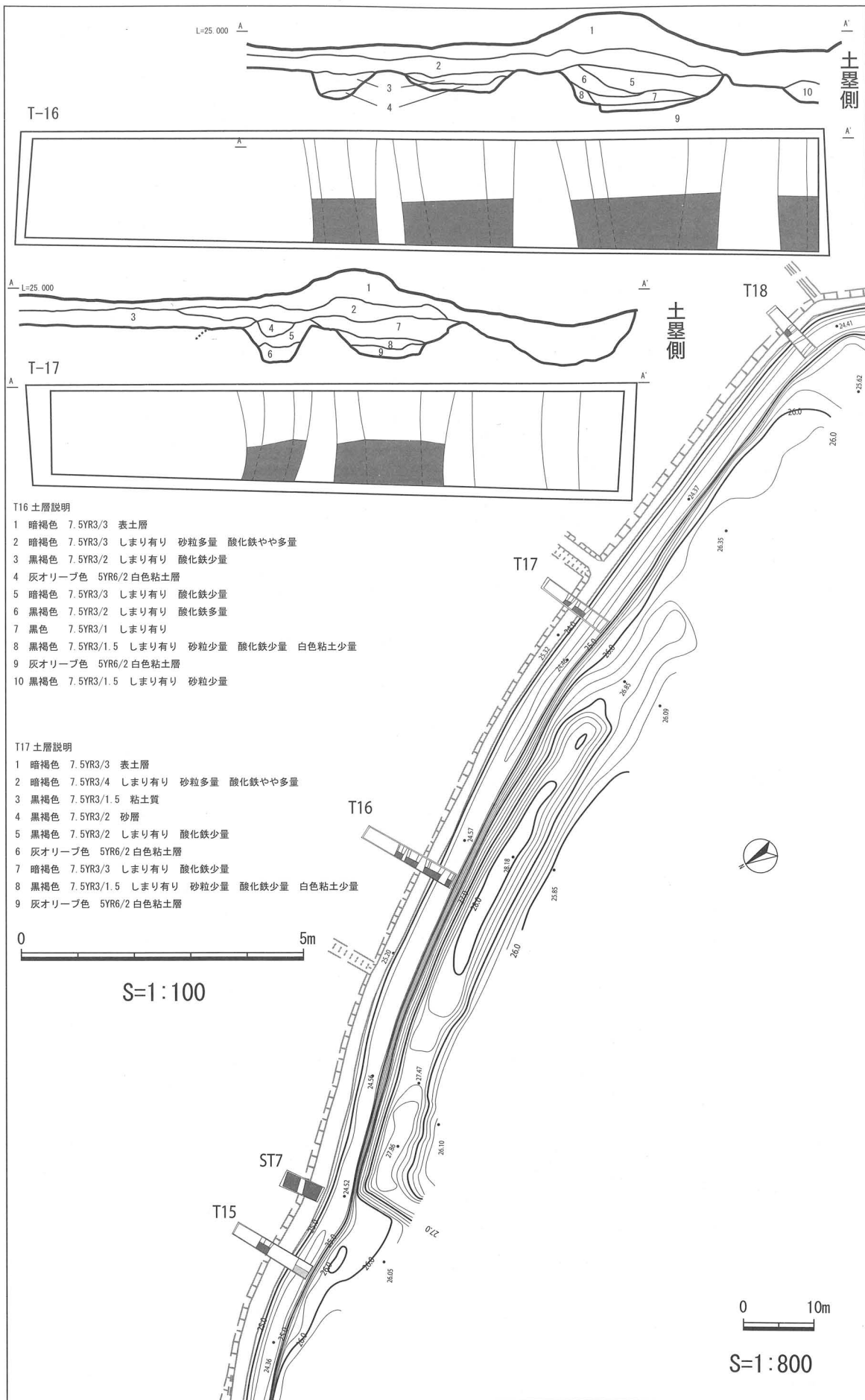


図13 トレンチ16, 17平面及び断面図

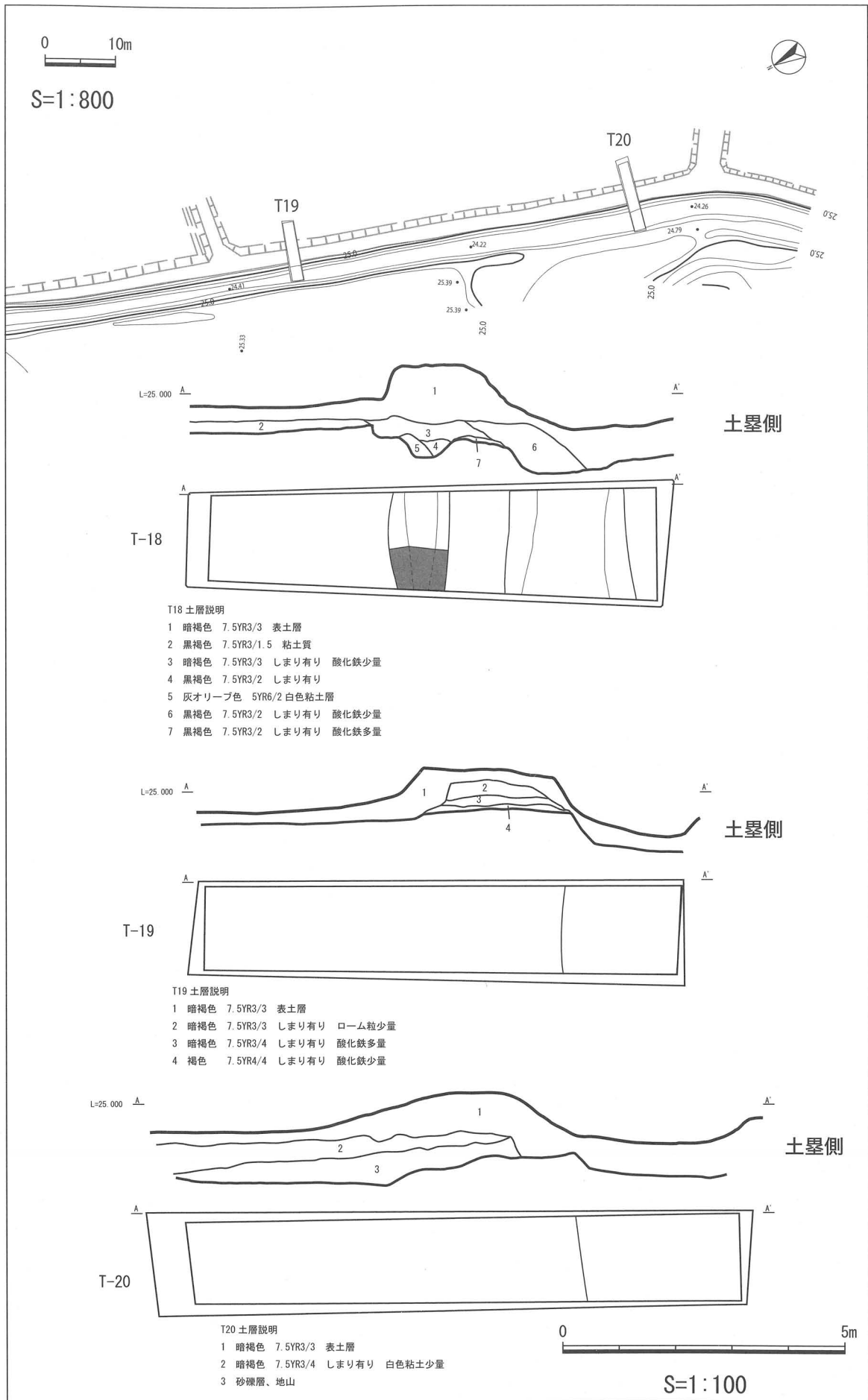


図14 トレンチ18, 19, 20平面及び断面図

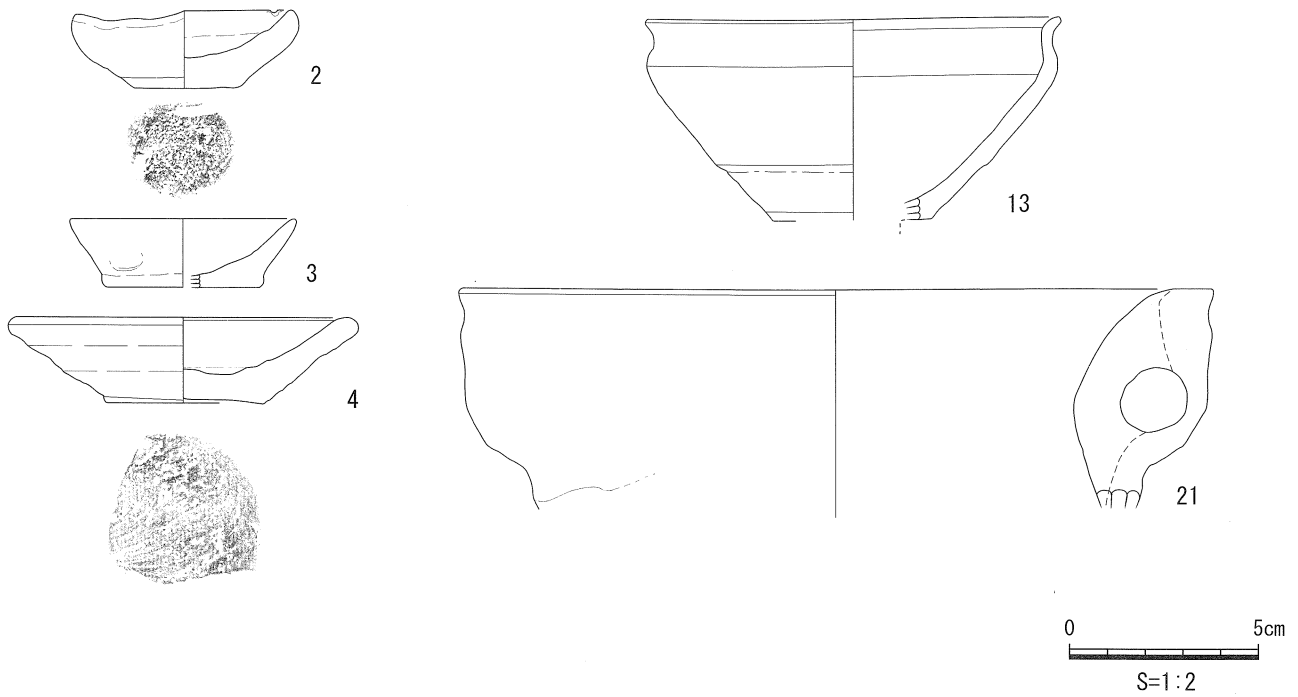


図15 遺物実測図 (S=1/2)

No.	出土地点	種別	内容	残存	法量(mm) (器高・口径・底径)	胎土	色調	焼成
1	T-11	唐津系・鉢	内面に重ね焼の際の胎土目痕を残す。高台は浅い。	底部	—	気泡入る	内外面：オリーブ色	良好
2	表採	かわらけ	口唇に刻みを持ち、ススが附着する。内外面ナデ形成。灯明皿。15世紀末。	ほぼ完	60・20.5・28	雲母・白色粒・石英	内外面：褐色	良好
3	表採	かわらけ	口縁は緩やかに立つ。底部は段を持ち薄い。体部・器内に成形による指頭圧痕。15世紀末。	2/5	60・18・42	雲母・白色粒	内外面：褐色	良好
4	T-14 覆土	かわらけ	口縁は外反する。内外面にススが附着する。ロクロ成形で底部糸切り。灯明皿。	1/2	93・22.5・42	白色粒	内外面：灰褐色	良好
5	表採	京・信楽系絵皿	時期不明。	胴部	—	細砂	内外面：黄灰色	良好
6	T-18	瀬戸美濃・御室碗	底部が広がり口縁は立つ。高台は低く浅い。胎土はやや脆い。18世紀代。	4/5	100.3・44.7・60.2	気泡入る	淡黄灰色	やや良
7	表採	瀬戸美濃・腰鉋碗	口縁は立ち、胴部に溝を複数持つ。18世紀代カ。	口縁	—	細砂	内外面：黄灰色、外面：褐色	良好
8	表採	瀬戸美濃・小壺	器厚は薄く、弧を描く。18世紀代。	胴部	—	精緻	内外面：淡オリーブ色	良好
9	表採	瀬戸美濃・磁器小皿	口縁は緩やかに開く。18世紀後半～19世紀。	口縁	—	精緻	淡青黄色	良好
10	表採	瀬戸美濃・搦鉢	内面に粗い擦り溝を持つ。時期不明。	底部	—	白色粒・砂粒	内外面：赤褐色	良好
11	表採	瀬戸美濃・搦鉢	口縁は開き段を持つ。内面に粗い擦り面を持つ。17世紀前半カ。	口縁	—	気泡入る・白色粒	内外面：暗褐色	良好
12	T-11	瀬戸美濃・搦鉢	口縁は開き段を持つ。17世紀代カ。	口縁	—	細砂	内外面：暗褐色	良好
13	T-1 覆土	瀬戸美濃・天目茶碗	口縁はS字を描き開く。大窯IV期後半に比定される。1600年前後。	1/5	—	気泡入る	内外面：黒褐色、外面：灰色	良好
14	表採	瀬戸美濃・天目茶碗	胎土は脆い。高台は浅く付く。	底部	—・—・43.5	脆い、白色粒	内面：黒褐色、外面：白色	不良
15	表採	瀬戸美濃・鉢	上記丸碗に類似する。時期不明。	胴部	—	精緻	内外面：黄灰色	良好
16	表採	瀬戸美濃・丸碗	口縁は緩やかに開く。18世紀代。	口縁	—	精緻	内外面：黄灰色	良好
17	表採	瀬戸美濃・丸碗	口縁は緩やかに開く。18世紀代。	口縁	—	精緻	内外面：淡オリーブ色	良好
18	表採	鉄釉小壺	産地不明。18世紀後半カ。	胴部	—	精緻	内外面：暗褐色	良好
19	表採	鉄釉小鉢	底部は「く」の字に折れる。時期不明。	底部	—	精緻	内外面：暗褐色	良好
20	表採	常滑・大壺	輪轆み痕を残す。中世カ	胴部	—	細砂・白色粒	内外面：褐色	良好
21	表採	内耳土鍋	胴部に張りを持ち、段を持つ。外面スス附着。15世紀末～16世紀。	口縁	(200)・—・—	雲母・白色粒・石英	内面：褐色、外面：黒褐色	良好
22	T-11	肥前・厚手碗	口縁は緩やかに広がる。精緻。18世紀代。	1/2	98.7・40.5・50.8	精緻	淡青灰色	良好
23	T-12	肥前・厚手碗	口縁は緩やかに広がる。精緻。18世紀代。	1/2	86・35.5・38.5	精緻	淡青灰色	良好
24	T-15	肥前・厚手碗	精緻。18世紀代。	底部	—	精緻	淡青灰色	良好
25	表採	肥前系・染付皿	高台は浅く薄い。18世紀代。	底部	—	精緻	内外面：白青色	良好
26	表採	肥前系・染付皿	蛇ノ目凹型高台を持つ。18世紀後半～19世紀初頭。	底部	—	精緻	内外面：白青色	良好
27	T-7	美濃・徳利	内面にも釉が附着。	胴部	—	白色粒		良好
28	表採	美濃・灰釉徳利	やや大振りな胴を持つ。17世紀代カ。	胴部	—	白色粒	内面：灰色、外面：オリーブ色	良好

表1 遺物観察表

## 第5章 まとめ

調査は海老ヶ島城の外堀を対象に規模・範囲を把握することを主眼に実施された。ここでは調査から判明したことを述べ、「海老ヶ島城絵図」から補足し検討したい。

堀は1・6・19・20を除くトレンチで検出された。最大4条、概ね2条の堀を検出しており、堀が連続して城郭を巡ることが確認できる。断面から確認できる形状は堀底に平面を持ちV字に開く葉研堀と緩やかに開く葉研堀に分類することができる。最大幅は4.4m、最深部は確認面から1mで、概ね幅2-2.5m、深さは0.6-0.8mと城郭の規模から考えると堀は浅く狭い。堀の底面には白色粘土が堆積しており、これは堀が水堀であることを示している。

特筆すべき構造として、トレンチ11で確認された堀の立ち上がりは、サブトレンチ4で畝状に地山を残すことから、浅いながらも畝堀であることを示している。トレンチ1から7の間では黒色粘土質土がトレンチ北側から0.7mの厚さで検出され、これはここが深田であったことを示していると考えられる。トレンチ15で確認される平場及び堀は他のトレンチとは異なり土塁側に堀を検出しない。隣接するサブトレンチ7からは2条の堀を検出しており、こちらは緩やかに土塁側に曲がっている。正面の土塁が横矢掛りに折れることから、ここが虎口につながる地点であると考えられる。トレンチ19・20からも遺構が未検出である。この地点では土塁が城内側に入るため、これに伴う堀も内側に入ることを示している。トレンチ6において遺構が未検出であるが、土塁を挟む南側に沼があり、何からの影響を及ぼしているものと思われる。

遺構に伴う遺物は無く堀の構築年代を判断することは難しい。ごく少数であるが、かわらけや内耳土鍋などからは15世紀末～16世紀の年代が示され、城の機能時期の遺物と考えられる。遺物の多くは近世陶磁器であり、18世紀の年代が示されることから、海老ヶ島城が松原村集落として成立している時期のものであると考えられる。

海老ヶ島城には、廃城後まもなく作成された絵図が3枚残されており、当時の集落及び海老ヶ島城の景観を知る上で非常に有効である。本報告書に掲載した絵図（写真図版1）は、寛永3年（1626）に作成されたと伝えられている「海老ヶ島城・松原村絵図」の写しで、慶応3年（1867）に作成されたものである。

絵図では堀は1条で用水路として転用されている。これは堀が水堀であることを裏付けるものである。また、虎口であるが、絵図からもトレンチ15付近にあることを示しており、トレンチ15の堀が虎口に伴う施設に関連があるのではないかと考えられる。また、絵図の他に図2の迅速図からも示されるとおり、トレンチ19・20付近では土塁が城内側に入るため、堀を検出しないことの妥当性をしめしている。

今回の調査において土塁は未調査であり、土塁と堀との関係を示すに至らなかった。今後の調査の重要な課題として留意すべき点であると考えられる。

### 参考・引用文献

明治大学文学部木村礎研究室編 1986 『明野町の村絵図』

茨城県教育財団 中・近世研究班 1994 「茨城の中世かわらけについて」『研究ノート』4号

明野町史編さん委員会編 1985 『明野町史』

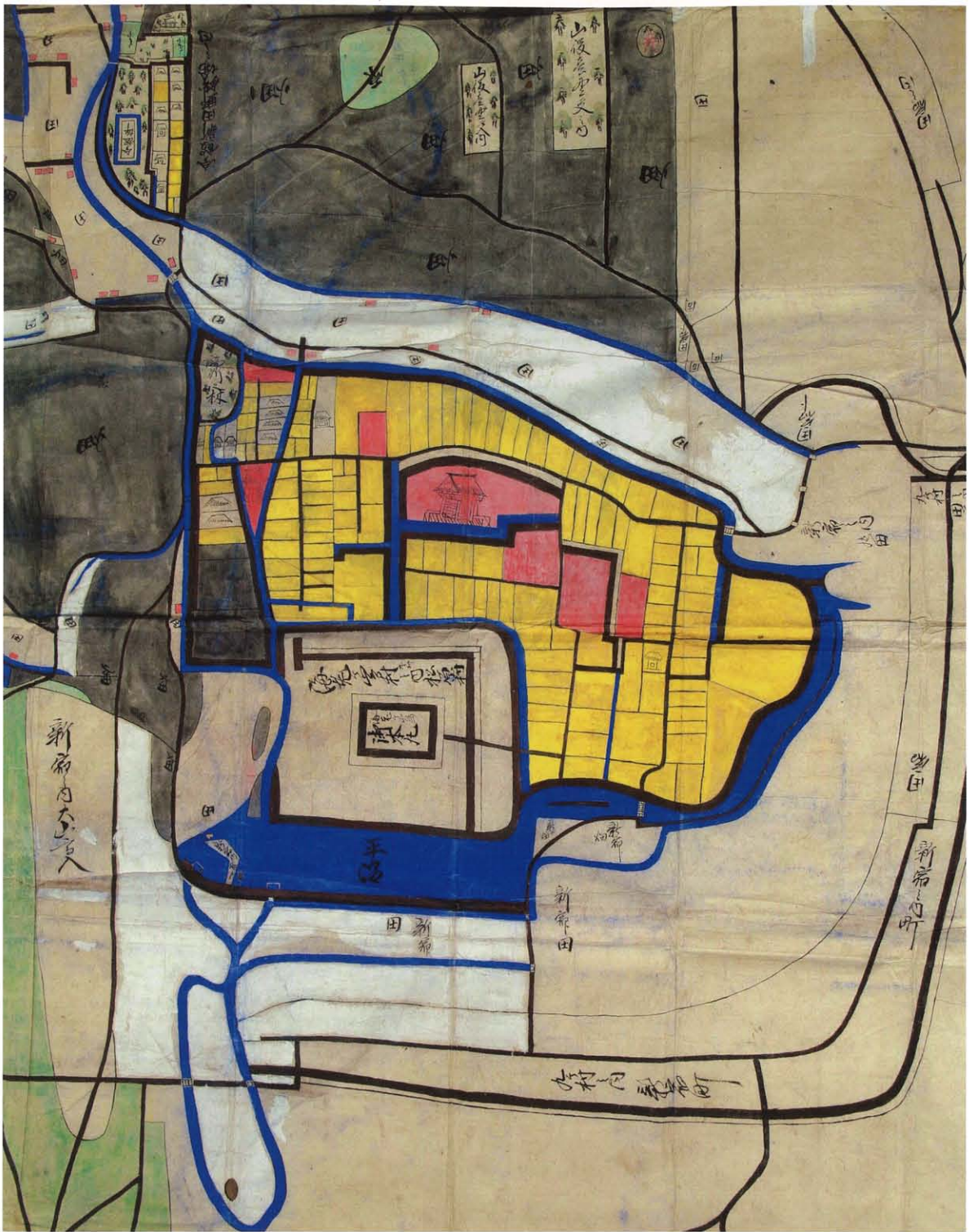
『日本城郭大系』第4巻 1979

財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター 2001 『瀬戸大窯とその時代』

瀬谷義彦編 1982 「茨城県の地名」『日本歴史地名大系第8巻』



# 写真図版



海老ヶ島城・松原村絵図（慶応3年写し）





調査区遠望（東から）



調査前全景（西から）



トレンチ1 検出



トレンチ1 セクション



トレンチ2 検出



トレンチ2 セクション



トレンチ3 検出



トレンチ3 セクション



トレンチ4 検出



トレンチ4 セクション



トレンチ5 検出



トレンチ5 セクション



トレンチ6 検出



トレンチ6 セクション



トレンチ7 検出



トレンチ7 セクション



トレンチ8 検出



トレンチ8 セクション



トレンチ9 検出



トレンチ9 セクション



トレンチ10 検出



トレンチ10 セクション



トレンチ11 検出



トレンチ11 セクション



トレンチ12 検出



トレンチ12 セクション



トレンチ13 検出



トレンチ13 セクション



トレンチ14 検出



トレンチ14 セクション



トレンチ15 検出



トレンチ15 セクション



トレンチ16 検出



トレンチ16 セクション



トレンチ17 検出



トレンチ17 セクション



トレンチ18 検出



トレンチ18 セクション



トレンチ19 検出



トレンチ19 セクション



トレンチ20 検出



トレンチ20 セクション



トレンチ冠水



サブトレンチ 1 検出



サブトレンチ 2 検出



サブトレンチ 3 検出



サブトレンチ 4 検出



サブトレンチ 5 検出



サブトレンチ 6 検出



サブトレンチ 7 検出



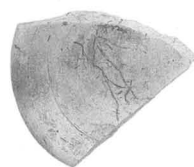
1



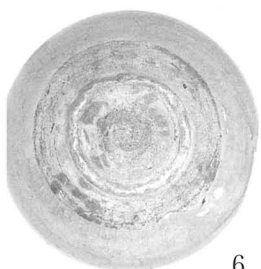
2



3



4



6



5



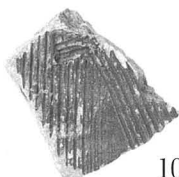
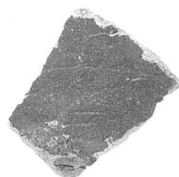
7



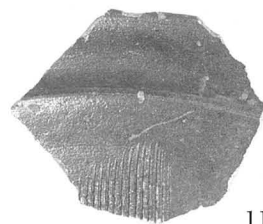
8



9



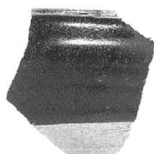
10



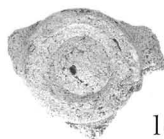
11



12



13



14



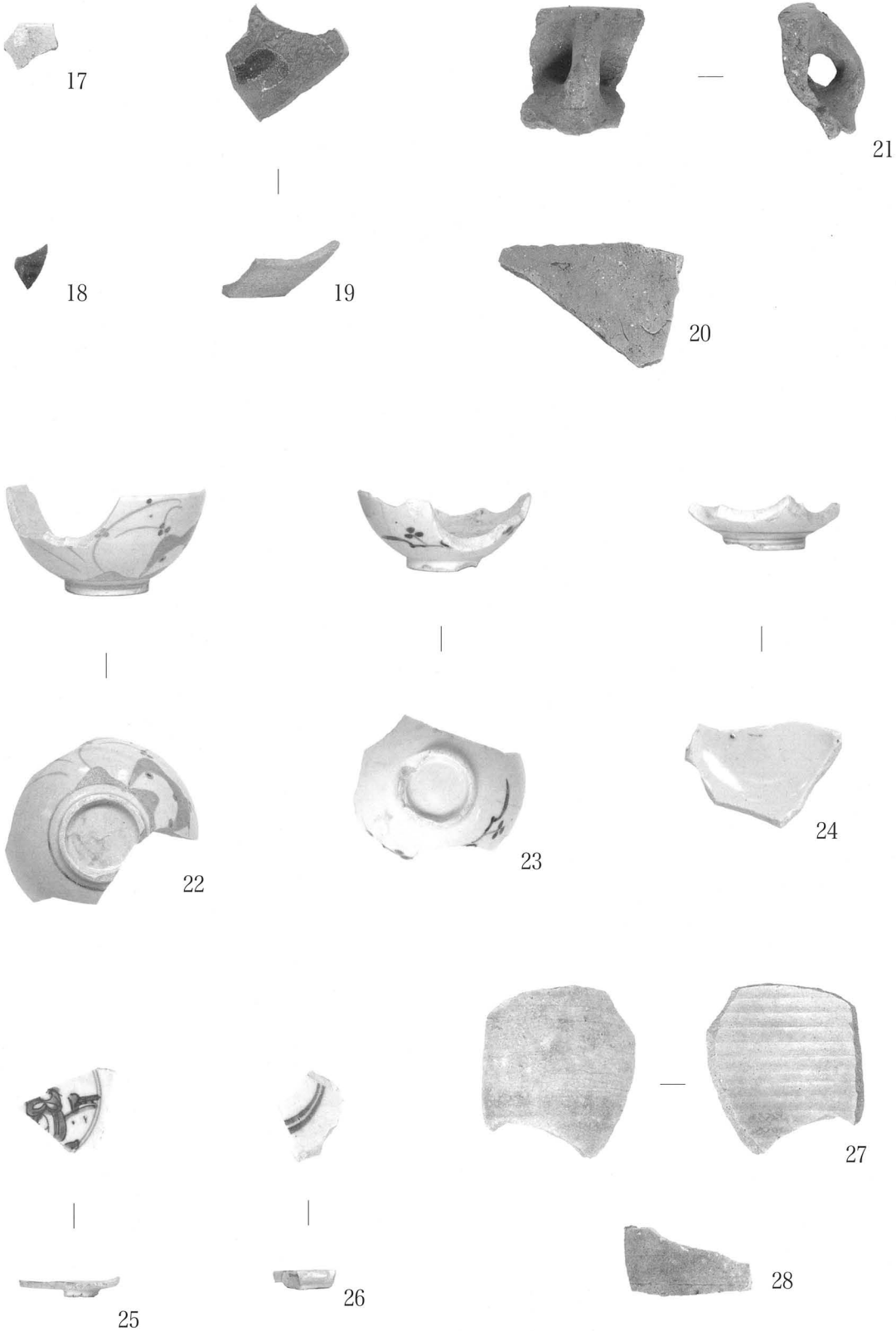
15



16

出土遺物





出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	えびがしまじょうあと							
書名	海老ヶ島城跡							
副書名	県営ほ場整備事業（経営体）松原地区関連遺跡発掘調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	筑西市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第3集							
編集者名	斉藤 武士							
著者名	斉藤 武士							
編集・発行機関 所在地	筑西市教育委員会 〒308-0021 茨城県筑西市甲862番地1 TEL 0296-22-0183 株式会社 地域文化財コンサルタント 〒286-0201 千葉県富里市日吉台1-23-12 TEL 0476-93-0770							
発行年月日	2006年（平成18年）8月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村遺跡番号						
えびがしまじょうあと 海老ヶ島城跡	いばらきけんちくせいし 茨城県筑西市 まつばら 松原141他	502016		36° 15' 17"	140° 2' 4"	2006. 5. 16 } 2006. 6. 2	490.5㎡	ほ場整備
所蔵遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
海老ヶ島城跡	城郭跡	中世	堀・土塁	かわらけ 陶器 磁器				
要約（特記事項）								
<p>調査方法は、地形および調査区を考慮しつつ、約50m間隔でトレンチ(2×10m)を20本設定した。表土を重機で除去した後、確認面を人力によって精査し遺構・遺物の検出を行った。必要に応じサブトレンチ(1×10m)を7本設定した。調査終了後、直ちに埋め戻しを行い現状に戻した。</p> <p>遺構は土塁と平行して0～4条の堀を確認した。一部のトレンチにおいて地山が畝状に残るため、「畝堀」の可能性が想定される。遺構に伴う遺物はなく、トレンチもしくは表採一括遺物として中世陶器・近世陶磁器・かわらけが出土している。</p>								